



四つ壇の枕石（ぬすびと石）

しかし、感応神社の縁起などは、それをさかのぼるし、端村の四つ壇は昔は八つの壇があつて、八つ壇と呼び後に四つになって四つ壇と呼ぶようになったとある。壇に松の古木があつたと風土記にみえる。この四つ壇の由来については後述するが、ここには枕石またはぬすびと石の伝説があつて、もう一つの小松・上荒井間のうばこ

屋敷の鬼ばの石の枕伝説と混じているようであるが、その石というのが発掘されて、四つ壇の成田善四郎の庭に置いてある。長さ一メートル六〇、幅五〇センチ、厚さ二四センチほどで、八つ壇なり、四つ壇を全部古墳と推定することは容易でないが、このぬすびと石は石英粗面岩で石廊の一部か、その棺蓋ではないかと思われる。四つ壇の一基の改裝されたというのが金田幸平宅の東北の隅に稲荷の小祠を祭つて残っている。風土記の老松があつたというのに思いあわせて、単なる河原地の開拓の石くらはなかったようにみえる。

菖名の臣が館を築くとしても、既に相当開拓がすすみ、多くの住民がいなければならぬわけであるし、既に古墳時代よりこの付近の中州には人々が住みついていたではなからうか。下小松の起りを室町の築城を遙かにさかのぼって考えることに、無理がないように思う。

2、感応神社と常徳寺の縁起 現在学校裏に稲荷神社と双殿にしてある多賀神社は、つい先の昭和四十年十一月十四日、今度の圃場整備事業のため、総計費八〇万円をもって移転・新築、遷座式を行なったばかりのものである。